

あり

①乾壘を温り蠟數片を其中に投しこきを熔
うして其内面に麿布を布するあり

弗律窩兒水素酸の硅酸を感せし機動ハ此酸の
傳紀中最重要とせる所あり○弗律窩兒水素酸
と硅酸とハ互に次の比例に従て分解を



弗律窩兒硅ハ新生抱合物にして氣状あり故に
此機動を以て勝ててよく火に堪ゆる硅酸を揮
突あつ抱合物に變せしむ○弗律窩兒水素酸ハ

總へて硅酸鹽類と同機を為し是こきを分解し
拔塞斯と抱合して弗律窩兒金類とあり硅酸に
ハ前々言へる法にて感せしむあり

閉工中殊に此玻璃を鑄する性を用ふ是氣状酸
を以ても其水に溶る液を以ても成る所あり
り○鑄刺せんを欲せし玻璃版を覆ふる白蠟一
薄層を以てし或ハ乳香^{ヤパルト}油^{ヤパルト}蠟少許の的列並
油の和劑を以てするを尚良とんこきを以て先
温りたる玻璃の全面に塗抹せし○細尖のる金類
を鑄鐵とあり其後欲せる所の圖畫文字を此鑄

地を刻し其處玻璃面を見よに至る。○水様液を以て鑄せんと欲せハ毛筆を以てこまを玻璃上へ塗り暫らりて水洗し玻璃を乾らしベシソル

①若ハ的列並油中へ沈らしこまを以て鑄地を摩り除くあり

②ヘンソルハ甚揮發あり真液にして方今石炭參用よりこまを大製も大々多脂物を溶かし易きもの為り有名あり者あり

氣形酸を以て鑄せしものハ鉛槽を造り鑄刺をへき版を以て其口を蓋ふあり此槽内へ硫酸を入

ま一片の木を以て弗耳乙私巴多赤を其中へ攪和し版の鑄をへき面を以て其上へ置きたる後緩徐に全槽を燒熱をこゝるも亦一二時の後圖畫せる線紋速に版上へ顯る

玻璃の驗温器の尺分刺せる玻璃鐘等の上へ度數を刺するも亦此酸の力あり

67
21
151

化學讀本前篇卷之七終

化學讀本前篇卷之七

